

エンドサクションを用いた 子宮内膜吸引組織診の有用性の検討

国立病院機構 長崎医療センター 産婦人科

梅崎 靖 三好康広 水谷佳敬 渡邊剛志 楠目 晃子 杉見 創
菅 幸恵 釘島 ゆかり 福田 雅史 山下 洋 楠田 展子 安日 一郎



はじめに

子宮内膜組織診は子宮内膜増殖症や子宮体癌など子宮内膜病変で実施される検査である。診断確定には必須の検査であるが、通常は鋭匙（えいひ）を用いて子宮内腔を搔爬するため疼痛を伴い、特に無麻酔での処置は患者の苦痛を伴う手法である。

エンドサクションは直径 3mm のプラスチック製吸引チューブで、子宮内膜スクリーニング検査用器具である。エンドサクションは従来の吸引式内膜検査器具と比較して吸引口が広く作られているため、より大きな病変組織の吸引が可能であり、組織採取の点で鋭匙を用いた手法と比較し、患者への侵襲をほとんど伴わない点を特徴としている。



目的

当院産婦人科では 2 年前より外来での子宮内膜組織診にエンドサクションを使用しているが、エンドサクションの有用性を検討した報告はない。

当院でエンドサクションを用いて子宮内膜組織診を行った患者を対象として、子宮内膜細胞診と比較した病理診断の精度を検討した。

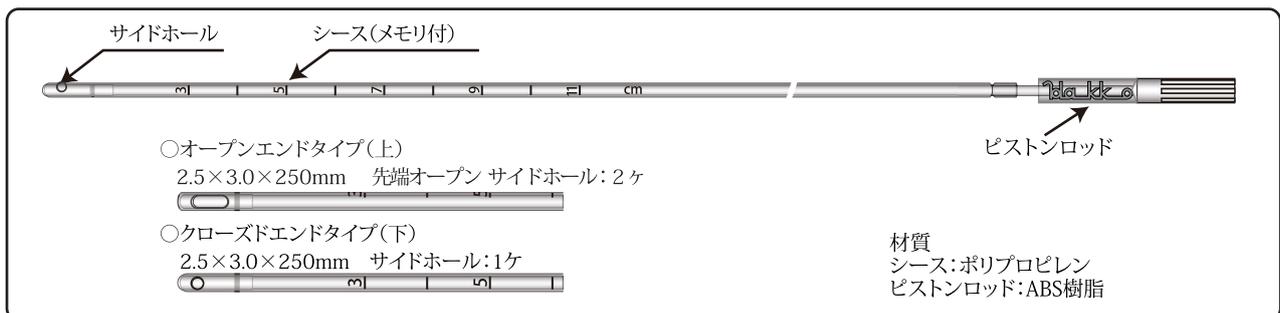


図 1 エンドサクション構造図

対象と方法

過去 1 年間に不正性器出血を主訴にもち、当院に紹介されエンドサクションを用いた子宮内膜吸引組織診を実施した患者 104 人のうち、治療として子宮を摘出した患者 36 人を対象とした。

- ・子宮を摘出していない患者に子宮体がんの発生は認めていない。
- ・エンドサクションを用いた内膜組織診の診断と摘出子宮の組織診断を比較し、内膜吸引組織診の感度と特異度、正診率を求めた。

参考として同一対象から採取された内膜細胞診の精度も同様に比較した。



図 2 子宮内膜スクリーニング検査用器具

結果

対象患者 36 人のうち、摘出組織の診断でがんと診断された患者は 29 人だった。「表 1」
 エンドサクシオンによる子宮内膜組織診の感度は 96.9% (31/32)、特異度 75.0% (3/4)、
 正診率は 94.4% であった。同時に実施した子宮内膜細胞診の感度は 81.3% (26/32) であった。
 「表 2」

対象患者を子宮体がんに限定した場合のエンドサクシオンの感度は 96.6% (28/29)、陽性適中
 率は 100% であった。「表 3」

エンドサクシオンと摘出子宮の組織診断結果が不一致であった 2 例は子宮内膜ポリープ 1 例
 と多量の出血を伴った類内膜腺癌 Grade3 の 1 例であった。

まとめ

不正性器出血患者に対するエンドサクシオンを使用した子宮内膜組織診は、侵襲性が低く
 かつ精度の高い有用な方法である。

組織型	
子宮筋腫	2
子宮内膜ポリープ	1
子宮内膜増殖症	
単純型	1
複雑型	3
子宮体がん	
類内膜腺癌 Grade1	17
類内膜腺癌 Grade2	5
類内膜腺癌 Grade3	4
漿液性腺癌	2
癌肉腫	1
	36

表 1 摘出子宮 36 例の組織型

	エンドサクシオン	内膜細胞診
感度	96.9% (31/32)	81.3% (26/32)
特異度	75.0% (3/4)	75.0% (3/4)
陽性適中率	96.9%	96.3%
陰性適中率	75.0%	33.3%
正診率	94.4% (34/36)	80.6% (29/36)

表 2 エンドサクシオンおよび内膜細胞診の精度

- ・内膜細胞診と同一手技でより高い感度を得られた。
- ・組織量が比較的少ない内膜ポリープの診断が困難であった。
- ・子宮内腔に血液が貯留した場合は組織採取が困難であった。

エンドサクシオン	
感度	96.6% (28/29)
陽性適中率	100%

表 3 子宮体がん 29 人を対象としたエンドサクシオンの精度

本内容は、2014/4/20 第 66 回日本産婦人科学会学術講演会（東京国際フォーラム）
 【ポスター会場 一般演題 141 子宮体部腫瘍・診断 2】で発表された内容により作成しています。